
我らのH S部

ピエロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らのHS部

【Zコード】

Z8212Z

【作者名】

ピエロ

【あらすじ】

小学校 中学校 高等学校が一貫した結構大きな学園。そこに存在する妙な部活動『HS部』。

自由気ままな活動しかしていないと思われるそんな妙な部活に、高等部の新入生、伊丹 甲いたみこうはそんな部活ならまつたり出来るだろうと思ひ入部する。

平凡で平和な、まつたりした生活をこよなく愛する甲だが、その部活の本当の活動を知り、その生活は大きく変わってしまう。魔法使いを名乗る女の子、謎の天才科学者、リアル忍者、異世界か

ら来たといつお姫様、複雑怪奇な顧問などなど・・・そんな彼らと共におくむちよつと変わった非日常ライフ。

ぶるるーぐ

春・・・

それは10代の男女なら誰しもが胸に期待を込める出会いと別れの季節。

空を見上げると雲一つない快晴、そんな空と宙に舞う桜の花びらは何とまあ風流なモノだなあと思つ。

今日は入学式。

今日で俺も高校生の仲間入りさ。

受験に受かったのは結構有名な学園の『美星学園』という小学校中学校 高等学校が一貫した大きな学園だ。田舎者の俺から見れば未知の世界だ。

入学式に向かうべく、桜並木の通りをのんびりと歩いていく。俺と同じ新入生だと思われる人の姿は時間が早いせいがあまり見られない。

俺だつて別にいつも早起きしてるワケじゃないよ?ぶっちゃけて言うと、ガラでもなくウキウキしそぎて早起きしてしまっただけさ。だからまあ俺はこうしてのんびりと歩いているわけよ。

俺も色々と期待を胸に込めているが、一番の願いは平和な学園生活だ。

高校生活も平和でありますように・・・っと、心の中で願い事。

だが俺は思う、願い事なんてそうそう叶うわけないと。

だけど、それでもわずかな可能性に期待を込めて願うのが人間つてものじやないだろうか?

ま、どうでもいいか。

歩いていくこと数十分。

田の前には学園と校門と、その傍らの『新入生入学式』と達筆な字で書かれている置物。

ああ、死に物狂いで勉強した記憶が蘇つてくるぜ。

「・・・よし、行くか」

気合十分！俺は少し緊張気味で学園へと脚を踏み入れる。
おお、田舎学校とはどこか空気が違う気がするぜ！

それが最初に思った感想だ。

登場人物紹介

伊丹 甲（いたみこう）

高校一年生の新入生で、本編の主人公的な存在。好きな食べ物はカレー 嫌いな食べ物はアスパラとほうれん草、容姿は普通よりは上くらいのいたつて普通な、大したとりえも見当たらない男子高校生。

団長（だんちょう）

高等部3年生で『H.S部』の部長。本名は岡田 英治（おかだえいじ）という名前だが、名前を言いつと怒られるので皆団長という。
『H.S部』最強の男で頼れる先輩。

気前の良さと美形な顔立ちは女性に人気だが本人には自覚がない。

望月 美鈴（もちづきみすず）

甲と同じく高等部の新入生。

甲と同じクラスで、美人でスタイルもよく、優しくて料理が得意というまさに男性人から見れば理想のクラスの人気者の女性。

ジャニステイルク・ハイラルド・ウェルバー

高等部2年生の『H.S部』の天才的科学者な男。

成績は全国？1という天才だが性格は面倒くさがりな怠け者。ジヤニスタイルク・ハイラルド・ウェルバーというのはただ自分が名乗っているだけで、本当の名前は刈部 秀介（かるべしゅうすけ）

鳳 美香（おおとりみか）

小学校の頃から学園において、内部進学の高等部2年生の女性。本人曰く『魔法使い』らしい。

静かな感じで、割と大人びた女性。

宗重 半蔵（むねしげはんぞう）

『HS部』の情報収集および情報処理担当の高等部2年生の男。時には天井から、時には掃除用具入れから、時には窓からと神出鬼没な隠密行動ならお任せあれなりアル忍者。

整った顔立ちにかなりの美声、いわゆるイケメンなのだがオタクといふことであまりモテない。

ミルフィア・ミルス・ミルティリア

何の理由でか『HS部』に所属する貴族のお嬢様。

本人曰く異世界からきた一国の姫だという、高等部の1年生。気品のある美しさと優しさが魅力的だと言われている。

ミスター・ジョージ

『H.S部』に所属する中学部3年生の男。

まったく当たらない出鱈目な推理を連発する自称名探偵。にぎやかのが大好きなノリのいいヤツ。細い身体に似合わず腕つ節は強い。

とあることが起きると人格の変わる多重人格者。

綾川 瑞希（あやかわみづき）

人見知りでやや引っ込み思案な中学部3年生。
人の心が読めるというとんでも能力を持つているという『H.S部』
看板部員。

目元が髪で隠れていて、不思議な感じの女の子。

殿田 達也（とのだたつや）

甲と一緒に田舎から出てきて学園に入学した幼稚園からの付き合いの男。

運動神経はかなりよく、勉強の方も中の上で、いいヤツなのだが女性に目がなく、女性に関する情報収集能力は宗重をも凌駕する。

CR

刈部の作った人工知能のAI。
部室そのものがCRであり、様々な機能を兼ね備えた歌つて踊れる人工知能。

第一話 題名?そんなの考えてないよ、題名なんてその場で思いついたものば

入学式を終え、俺は教室へと向かう。

俺のクラスは1年G組。クラスは全部で7クラス、A～G組みの7つだ。

ちなみにA～Dクラスはいわゆる特進クラス、バカみたいに頭のいいヤツの集まるクラスだ。

俺のいるクラスも含まれる、E～Gクラスはまあ平凡な、いたつて普通のクラス。

普通が1番、そつじやじやこませんかねえ？

教室に着くと、皆黙々と指定された席に着く。じつやら出席番号順に座るらしい、俺は同じみの1番右列の1番先頭だ。名前、『い』で始まるから。

まあ・・・慣れてるからいいけどね？それでも1番前の席ってのは俺にとってはあまり気持ちのいいもんじゃない。それが新学期なら尚更ね。

だがせめてもの救いは〜、救いつて言うのか？俺の隣の席に昔からの馴染み、殿田がいることだ。

「なあ殿田」

「ん?どうした？」

隣の席に座り、チラチラと周りに視線をめぐらせている昔馴染み、殿田に声をかける。

新学期とあって今は皆基本無言だ。少なからず同じ中学校だった

のであるう人たちが話しているのが分かるが、その声は決して大きくない。

「どうか、こんな沈黙の空間で大声で話せるヤツがいたら見てみたいぜ。」

といつひとで、殿田にかけた声も自然と小さくなってしまう。

「俺も、じつは沈黙苦手なんだよ・・・」

「知ってるさ、お前昔からそうだったからなあ～」

「だからさ、どうにかしてくれよ」

「無茶言つなよ・・・さすがの俺でもそれはキツイぜ」

「だよなあ～」

そんな取り留めのない話をしていると、ガラツと音を立てて閉まつていた教室の前扉が開く。

そこから20代前半くらいの女性の先生が入ってきた。
しかも結構美人、スタイルも中々・・・これは当たりか?

「おはよー、じゃいまーす、今日からこのクラスの担任になります泉佐奈子です。1年間よろしくお願ひしますね」

カツ、カツ、と小気味のよい音を立ててチョークで黒板に名前を書き、ニッコリ笑って一礼。

泉先生か、いい先生そうだ。

「それじゃあ皆も自己紹介してもいいかな?」

そう言つて1番右列先頭の男子生徒を見てくる。

すなわち、俺だ。

名字のせいか大抵そなんだよな、こいつ状況の自己紹介ってかなり緊張するのにそれが1番最初だぜ？加えて新学期、失敗することすら許されないとマジで処刑モンだろ！俺が何をしたつていふんだよ・・・っ！

「ええ～とそれじゃあ伊丹君、お願ひできますか？」

「あ、はい」

お願ひできますか？つていうけど絶対に断れないよな。

俺は緊張気味な内心が表に出ないようボーカーフェイスを心がけ、立ち上がる。

ワオ！視線が集まつてくるぜー！

チラリと殿田を見るとニヤニヤしている。コイツ、後で殴つてやる。覚悟しどけよ？

「―――中学出身、伊丹 甲です。よろしくお願ひします」

どうにか噛まずに言えたぜ～。心中ガツツポーズ。

逸る気持ちを抑え、ゆっくりと腰を下ろす。ここまで来てやつと一安心。正直疲れたぜ・・・

「ありがとうござります～、じゃあ次・・・」

その後は、殿田が普通の自己紹介をしたことに少し驚いたくらいしかなく、普通に自己紹介は進んでいった。

それから先生から明日の流れを聞き、今日は解散ということにな

つた。

まあ新学期の初日なんてこんなモンだよな。

「あ、それから部活動の仮入部と見学はもう始まっていますので、皆さもぜひ見ていくくださいね~」

最後に先生はそう言つて教室を出て行く。
ふう~何から開放された気分だぜ。せ

「甲~、お前どつか部活見に行くか?」

「いや~、とくことよ

「お~マジで?じゃあひょっと付き合えよ

「いいよ、何?また陸上部?」

「いや陸上はやめとく、もつと別なモンやりたいから

「やうなのか?勿体ねえな~」

カバンを取り、俺と殿田も教室を出る。

殿田は中学の頃、確か陸上で県大会準優勝したことがあったと思つ。それを思つと陸上やんないのは勿体ないと思つ。
まあ、本人がいいならいいか。

まず向かったのはサッカー部。
うん、やっぱりサブマシンショート的な超人技は無いんだね。ち
ょっぴり残念。

「殿田お前サッカーできんのか?」

「まあな、運動系全般はいけるぜ?」

「羨ましい限りで・・・」

殿田は昔から運動神経がよかつた。それに比べて俺は、どちらか
といふとダメな方だ。その運動神経分けてくれよ!なんて殿田にむ
かって何度も思つたことか・・・、思い出すだけで悲しくなる。
そのくらいダメなのだ。

ああ・・・自分で言うと余計悲しくなってきた・・・

「じゃあサッカー部にすんの?」

「いやあ~どうだろ?他も見に行こうぜ

「つよ~かい

どうやらサッカー部は候補の一つらしい。

いいよな、やりたいスポーツを選べるなんて。俺なんて出来るも
のしか出来ないのによ。

次に向かったのはテニス部。

軟球なんて生易しいもんじやない、硬球ボールを使った硬式テニスだ。当たると痛いんだつけ？あのボール。

とりあえず試合を見学させてくれるところの、試合を見学する
硬式テニス部は男女比率が3：7の割合で女性が多い。それが目
当てに入る男子生徒も少なくないらしい。

もしかして「トイシもそつなのか?

そう思い、殿田を見てみると、やや鼻息を荒くして試合をしている女性の先輩の太ももを凝視している。

おいおいマジかよ、そんな理由で入部とか格好悪すぎね？

「殿田、お前テニ又邪ニすのうか？」

「おう、決めたぜ、俺はこの部活に入る！」

「ヤマハ」の音楽文化

まあ入る理由なんて人それぞれだよな。俺がどうこう言つことじやないか。

というワケで殿田の入部先が決まった。

「甲はどう」か見なくていいのか？」

111

テニス部を見に行くために外に出たので、その足で帰ろうとした
俺に殿田は言う。

部活ねえ～どうしようかあ～

「お前運動苦手だから、やつぱり文化部か？」

「そうだな、多分そうなる

「見に行かないでいいのか？」

「今日せっこう、やつぱり適当な部活見つけ入るか？」

「さうか、じゃ帰るかあ～

「おひ

そう言つて2人で帰り道を歩いていく。桜並木の通りは相変わらずキレイだなあと思つ。

俺の隣にいるのがコイツじやなくて、かわいい女の子だったらどんなに嬉しいことか。

「お前今『何で隣がコイツなんだよ?』とか思つただろ?」

あつ、バレた。

「それはお前もだろ?」

「へへ、よくお分かりで」

そんな取り留めのない会話をしながら家に帰る。

家は学園から徒歩30分の道のりだ。田舎から無理して来た俺と殿田には、自転車なんて文明の利器など持つてこられるはずもなく、

「つして歩いてる。

これから毎日これが・・・今からヤバくなっちゃう。

それから歩き続けていくと家に着く。
家といつても家賃の安いボロアパートだ。俺と殿田はここに住んでいる。

俺が203号室 殿田が204号室 つまりお隣さんだ。

「じゃあな甲、夕飯になつたら呼んでくれ」

「はいはい、了解しました~」

俺と殿田はお隣さんだし、仲もいいから基本一緒に飯を食つている。

食費はお互いで出し、料理は俺が作る。殿田は料理できねえからな、俺が作るハメになつてている。

「さて、今日はカレーにすつか

今日は記念すべき高校生活の初日。俺の好物、カレーを食つたつて罰はあたらんだろ。

わう思い、食事の準備をする。

殿田と飯を食い、テレビを見ながら少し話をし、解散した後は風呂に入る。

まあ普通だよな。

それから寝る準備をして布団に潜り込む。

時間は11時。

普通の高校生なら寝るには早い時間だらうが、俺は別にする」と

もないで寝る。

今日も一日、中々疲れた一日だったぜ。

第一話 眠眠は大事、でも夜更かしするのが現代っ子

半開きになつたカーテンから光りが差し込み、その眩しさで目を覚ます。

時計を見ると午前5時21分。

普段よりも1時間近く早く起きてしまつたらしい。

クソッ、何でカーテンちゃんと閉めなかつたんだろ、悔やまれるな。それにこんな早起きした時に限つて目覚めがいい、はあ・・・もう一度寝する気にならないし起きるか。

そう思い布団から這い出て、カーテンを全開に開く。
ああ～ちくしょ～、太陽が眩しいぜ！

「飯作るか～」

とにかくすることもないし飯を作る。今日の朝食は田玉焼きにサラダ。

田玉焼きは卵を焼くだけだし、サラダに限つては生野菜を洗うだけの簡単なものだ。

卵を焼き終え、野菜を洗い、ドレッシングを掛ければ朝食の完成

。手を合わせていただきます。
自分で言うのもなんだけど、田玉焼きの焼き加減が絶妙でうまかつた。

ものの数分で食べ終えた俺は食器を洗い、片付け、登校の準備をする。

家を出るときに時計をチェック。時間は午前6時30分。2日続

けて早めの登校だ。

歩くこと30分。

とくに何も起きて学校に着いた。まあ何か起きたら困るんだけどね。

時刻は午前7時。ちなみにこの学校の登校時間は8時30分までであり、7時に登校してくる人は中々いない。そんな静かな学校を、俺は歩いていく。

教室に着き、横スライド式のドアを開けて教室に入る。

すると教室には1人の女の子がいた。

やや茶のかかった長い髪、俺よりは小柄だが制服越しからでも分かるスタイルのよい身体。って俺はいったい何を見ているんだよ。

「えっと、おはようございます？」

何となく挨拶をするが、疑問形になってしまった。

そんな俺の挨拶に、むこうも「おはようございます」と返してくれた。何か女子に挨拶されるとそれだけで嬉しい。

「伊丹君はいつもこのくらい早いの？」

「え？」

自分の机にカバンを置き、中身を整理しようとしたら声をかけられた。

突然のかけ声に、思わず気の抜けた返事をしてしまつ。つう一か这个人、俺の名前知つてんだ。

「めんなさい、俺君の名前知らないや。

「えつと、まあ偶々だよ偶々」

「そりなんですか？ 昨日も早く来てませんでした？」

そんなことを思つて答えた言葉に、意外な言葉が返つてきた。
何でこの人俺が昨日も早く来たこと知つてるんだろう？

「まあ昨日も早く來たけど、どうして？」

「私も早く來たから」

「そつか」

まあ そうだよな。むこうも早く來ていたんなら、俺が視界に入つてたつて不思議じゃないな。

「伊丹君は私のこと分かる？」

話は終わつただろ。 そつ思いカバンの整理に戻るつとした瞬間、
声をかけられた。

しかも何の脈絡も無い質問だ。 加えてそんな質問は俺には答えられない質問だつた。

「ええと・・・」

どうする・・・正直に言つつか？それとも頑張つて思い出すか？誤魔化すか？

いやいやどれも難しいや。正直に言つと怒られそうだし、思い出せる気しねえし、見た感じこの人には誤魔化しが効かない気がする。ああ・・・どうしよ・・・

「うめん、分からなー」

正直に言おう。

心にそつ決め口を開く。

「そつか、じやあ改めて、私は望月美鈴。貴方は伊丹甲君だよね？」

正直に言つたものの、彼女は嫌な顔も残念そうな顔もせず、改めて自己紹介をしてくれた。

この人、いい人だなーと思つ。

「うん、俺は伊丹甲。よろしくね」

「いらっしゃい、1年間よろしくね」

ニッコリと微笑んで望月さんは言つ。すげー、めっちゃ別嬪さんじやん。

その後は皆が登校していくまで少し会話をした。
そこで一つ言おう。望月さんはめっちゃいい人だった。

「甲へお前部活決めたかあ？」

「いや、決めてないよ」

今日はまだ授業はなく、学校についての説明やうのガイドラントスを受けて終わり、気がつけば放課後。放課後と言つてもまだまだ昼だけど。

「それより食堂に飯食いに行かない？」

「おおいいね、さんせーこ」

俺と殿田の昼食は基本学食だ。理由は簡単、弁当作るの面倒くさいし、作るために早起きするのほんとうも気が進まない。
というわけで俺と殿田の昼食は学食なのだ。ハハハ、貧乏なのよね・・・

今日は先輩達も午後の授業が無いらしく、食堂は人でいっぱいで、かなりにぎわっていた。

購買機のパンをめぐつて騒いでいたり、食堂のおばけやんに昼食を注文するべく長い列を作つては騒いでいる。
俺と殿田もその列に混じる。

並ぶ」と十数分。やつと順番がきた。

「おまけに、牛丼頼みます」

「あ、俺はパスタ、ナポリタンで」

「はいよー」

それぞれ丼食を注文し、俺は牛丼を受け取ると席を捲すべく見回す。

うへん、ジーマジにてなわかつだな・・・

そんな時。

「あひ、伊丹君、一緒に食べない?」

声をかけられた。

振り返ると長テーブルの端の方に望月さんがいて、小さく手を振つている。

「ここなの?」

「やうひよ、お隣じいわせ

望月さんは招かれ、俺は望月さんの隣に、殿田は俺の正面に座る。

「伊丹君は今日牛丼食なの?」

「まあ、弁当作るの面倒くせーから、多分これかうまいと牛丼

「俺も俺もー弁当作るの面倒くせーから、多分これかうまいと牛丼

だよー。」

「ナリなんですか・・・」

やや興奮気味の殿田に、少々押された氣味の望円さん。
ところが殿田、それ別に血腫で起きるモノじゃないでっ。

「殿田、お前は料理すら出来ないだろー。」

「え?あ、まあナリともこうなー。」

何故か高テンションでこり殿田。コマイシルになると面倒くさいんだよな。

とつあえずそんな会話をしながら俺は牛丼を食べげる。

「望円さんは部活とか決めたの?」

ナポリタンをすすりながら殿田が唐突に言ひ。コマイシ部活の話好きだよなー、まあ自分は運動出来るから血腫とかできひかもしれない。それに比べて俺は・・・まあ・・・

「部活ですか?一応決めてるナビ・・・」

「え?マジで!部副部长のー。」

おこおこそんながりつくなよ、望円さん困つてゐるよ。
ところが鼻息荒い・・・

「え?ヒトエヒヒ部つてこり部活なんだナビ」

「「H.S部?」」

殿田と声がハモった。あんまり気持ちのいいモンじゃないけど。

「甲、聞いたことあるか?」

「いや、あるわけないだろ

「だよな~望月さん、それってどんな部活なの?」

まあ当然の疑問だよな、俺も思ったもん。

「H.S部は・・・まあ文化部の一つなんだけどね、ちょっとした娛樂部みたいなのかな?」

微妙にはにかんで望月さんは言ひ。

それにしてもちょっとした娛樂部か・・・のんびり出来そうだな。

「甲、お前入るのか?」

俺の考えを察したのか、殿田が尋ねてきた。ホントに妙なところ
で鋭いよな、コイツ。

「まあな、だつてのんびり出来そうじやん?」

「はは、お前、うまいぞ!」

「伊丹君も入るのー?」

「うん、今決めた

「本当に…じゃあ早速入部届けだしに行こうよ。」

「お、おつかれ。

答えた途端、俺は望月さんに手を掴まれ、望月さんは走り出した。一きなりのことだと転びそうになつたが、何とか体勢を立て直して俺も一緒に走り出す。

それから職員室に向かい、入部届けを2枚もりい。それに希望の部活と自分の名を署名し今度は別の建物に向かう。向かった先は通称部活棟。文化部や運動部の部室は全てここにあるという大きな建物だ。

俺がいるのはその棟の最上階、目の前には横スライド式のドアと『H.S部』と達筆に書かれた看板がある。

その時はまだ知らなかつた。

この入部届けのせいで俺の日常が変わっていくことを・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8212z/>

我らのHS部

2011年12月26日21時15分発行